

2023 年 10 月 12 日

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業 活動報告書

1. 業務の概要	
(1) 事業名	「ジンバブエにおける女性音楽教師育成を通じた女性の地位・収入向上を目指すプロジェクト」(チャレンジ枠)
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人しまなみアートファーム
(3) 実施期間	2022年11月1日～2023年9月30日
(4) 実施国	ジンバブエ
(5) 活動地域	ハラレ
(6) 活動概要	<p>①活動の背景： ジンバブエでは、女性への性暴力、児童婚や若年妊娠・出産が問題になっている。また、教育の機会が妨げられることで、生涯を通じて暴力・搾取・虐待を受けるリスクが高まると言われている。さらに、ジンバブエ社会において、音楽は非常に重要な位置づけであり、音楽で女性が自立して収入を得る機会を創ること、また人口の48%を占めている子供に質の高い教育の機会を提供することは重要である。しかし、現在のジンバブエでは、音楽教師として収入を得たいと思っている女性が多いものの地位は低く、収入も十分に得ることができていない。また、小学校では音楽の授業はあるが、楽器などがなく教員が歌を教える程度しかできていない。</p> <p>一方で、日本では小学校で鍵盤ハーモニカを購入する小学生が多いが、小学校卒業とともに不要となり廃棄されている。</p> <p>②活動の目標： ジンバブエの女性音楽家たちが西洋音楽の楽器を使った音楽授業を実施するスキルを身につけ、音楽教師としての収入の向上を図るとともに、ジンバブエ社会での女性の自立と地位向上を図る。</p>
2. 業務実施結果	
(1) 実施した内容	<p>【実施内容①】 〈楽器寄付〉ジンバブエの現状について日本の支援者に周知し、不要になった鍵盤ハーモニカの募集活動を行い、ボランティアでクリーニングを行う。また、募集活動を通して国際協力やジンバブエの状況などを伝えた。</p>

【実施内容②】

〈現地研修〉2023年2月、9月にそれぞれ二週間程度の渡航の中で、現地の実技中心の音楽専門学校、Music Crossroad Academy Zimbabwe(MCAZ)の生徒10名とミッドランド州立大学(MSU)*ハラレ校10名に対し、まずは、音楽教師を育成するために、アメリカで人気のある教材を紹介、楽器の演奏技術や音楽基礎力を身につける研修を始めた。研修の中では、ジンバブエの民謡や国歌なども音楽教師として演奏できるよう指導した。9月には、MCAZでの研修に加え、MSU本校(グウェル)の音楽科の全生徒50人程度、講師陣に対し、鍵盤ハーモニカのプレゼンテーションを実施し、教材を寄付するとともに、講師陣に教材を使った授業計画案、学期末の試験内容を提案した。

*MSU:ジンバブエ最大の国立大学であり、ジンバブエ国内に6つのキャンパスがあり、2万5千人が学ぶ総合大学

【実施内容③】

〈オンライン研修〉2022年11月以降、日本からオンライン研修や動画での課題提出による鍵盤技術向上や西洋音楽基礎理論の習得を目指すのが、現地の電気供給事情の悪化や研修生たちの適切なデバイスの不所持などの理由でオンライン研修の継続が困難になったため、2023年2月の渡航時に選出した2名の講師に対し、オンライン研修のできるデバイスを提供した。それにより新研修体制を構築。団体代表による講師へのオンライン研修-学生への対面での研修-研修内容の報告書提出までを1回の研修とし、月2回の予定で研修を実施した。

【実施内容④】

〈大学音楽科への音楽プログラム導入〉当初の計画には含まれていなかったものの、現地での研修実施体制を構築していく中で、フルタイムの学生が中心のグウェルにあるMSU本校でカリキュラムにプログラムを導入させる方向で、学部長や音楽学科長や講師陣を含むMSU本校との2023年2月に協議を行った。9月の訪問時には、全講師を交えた協議を行い、鍵盤ハーモニカを使った鍵盤技術と音楽基礎知識を身につけるための授業計画や試験の内容について話し合った。

(2) 実施成果 :

【実施内容①】

〈楽器寄付〉寄付募集活動により、日本全国から80台の鍵盤ハーモニカが集まり、寄付活動を通じて国際協力への参加と理解を深めてもらう機会を提供した。現在までに65台の鍵盤ハーモニカをジンバブエに持ち込んだものの、配備予定の鍵盤ハーモニカは税関書類不備のため税関倉庫にて未だ保管されており、現在も引き続きC/Pが対応している。免税での正規ルートでの楽器輸入の提出書類や税金申告のためのライセンス番号の取得などで時間がかかったものの、ライセンス番号も無事に取得済みであるので、手続きが完了次第、楽器配備予定のMSU本校に届け、良い多くの学生が楽器を手に出れるようにしたい。

今回の経験により、ジンバブエに楽器や教材を免税で持ち込む際の必要な手続きを知り対応を進めているので、今後はスムーズに持ち込むことができる。

【実施内容②】

〈現地研修〉2月と9月の研修時には、団体代表が研修で直接教え、他2名の講師がサポートに回った。

その他は、現地講師が月2回のペースで研修を継続した。当初30人いた研修生は現在10人程度になっている。最初に研修内容やどのようなプログラムになるのかをよく伝え、責任を持って継続していくことを約束させなかったことも一因であるが、研修生たちは基礎的な技術や知識中心の研修が重要ではあると分かっているにもかかわらず、楽器の練習のように継続した修練を必要とすることが文化的に備わっていないため継続が難しかった。加えて、MSUハラレ校の学生は仕事や家庭の事情で鍵盤ハーモニカの研修を行う時間的な余裕がなく、導入が難しいと判断した。MSU本校でのカリキュラム導入に切り替えることで、より効果的に音楽教師を目指す女子学生たちにアプローチしていきたい。

一方で、継続してきた生徒たちは上達を実感し、音楽基礎力がついたことにより、自ら応用して自分なりの演奏方法などを創意工夫している様子が見られた。今後は、『長期的に身につけていくべきこと』を研修で続けていきつつ、『発表の場』を定期的に作るなど、やる気が持続できるような体制で実施する。現在は、11月初旬の試験と修了証授与式・コンサートに向けての準備で研修を週1回に増やしている。MSUハラレ校の研修生もMCAZにて合同で研修を行っている。

【実施内容③】

〈オンライン研修〉当初は、オンライン研修を本事業の参加者全てに対し団体代表が日本から実施することにしていたが、電気供給事情、インターネット環境、必要なデバイスの不足などの理由により難しさを実感。2月の訪問時に講師2名に対してのオンライン研修体制を構築し、講師2名への研修に切り替えた。MSUハラレ校とMCAZの2校で講師が生徒たちの対面での研修を1ヶ月に2回のペースで実施していくこととし、9月までにMCAZは、13回の研修を実施。MCAZの講師は、フルタイムの講師で学校に常にいることもあり、練習時間も確保でき、生徒の様子もモニタリングできている。MSUハラレ校は、4回の研修しか実施できなかった。MSUハラレ校は、土日のみの週末学校であり、研修参加者の学生たちは、平日は仕事や家庭の事情で研修への参加が難しく、また講師がフルタイムの講師ではなく学生の代表だったので、研修に十分な時間が割けなかった。そのため、最終的にMCAZの講師が研修生を全て引き受ける形で研修を継続した。現地の事情に即し、当初計画から柔軟に実施体制を見直しながら継続的に研修を実施した結果、計画の研修人数、回数には至らなかったものの、現地で今後継続的に実施するための体制が構築された。

【実施内容④】

〈大学音楽科への音楽プログラム導入〉鍵盤ハーモニカを使った鍵盤技術と音楽基礎知識について、大学のカリキュラムに取り入れること、団体として技術指導に協力していくことに合意。現在大学との間で合意書の承認を待っている。2023年10月より開始する新学期から授業として開始されることになっている。MSU本校では、音楽科に海外協力隊の要請も決まっており、派遣が決まれば現地での音楽教師育成のための音楽力底上げに向けての体制が安定していくことが期待される。

(3) 得られた教訓など：

- ・鍵盤ハーモニカを渡す際には、研修生からのコミットメントの確認が必要。研修を継続しない場合に返却を依頼しても回収するのは困難である。
- ・研修参加者の中には、小学校・中学校で音楽教師として働いている者も多く、すでに、鍵盤ハーモニカを導入し自分なりの使い方をしている。研修では、音楽基礎力の向上に力を入れていくことで、現場に即した方法に応用できる技術を養うことができると感じた。
- ・1980年代から社会状況も悪化していき、将来に希望を持つことが難しい状況である。インフレ率も高く、多くの人が3つ以上の仕事を掛け持ちしながら毎日を生き延びているので、皆次から次とたくさんのかんごに関わりながら忙しくしている。そのため、楽器の練習のようなすぐに成果が出ないものに取り組むのは難しい状況であろうと推察する。
- ・女性の地位向上、収入向上を目指して研修を実施しているが、公共交通機関がほぼなく、移動の際には車の運転ができる男性に依存する傾向にあること、家庭環境や子育てなどで時間が割けないことから研修の継続が難しく、活動を通じて女性支援の難しさを実感する。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

【ジンバブエ渡航】

2023年度も JICA 基金に採択が決まり、2023年11月に渡航予定である。

11月渡航時の目的は、1) プログラムの最終試験 2) 修了証授与式・発表会 3) MSU 本校での鍵盤ハーモニカ授業導入に関してのモニタリング、である。

今後の研修に関しては、1) 「第一期生が2年目の研修」を継続させること、2) 「第二期生の開始」の二本立てになる。

【オンライン研修】

講師へのオンライン研修に関しても引き続き月2回の研修を続行し、報告書の提出により日本からモニタリングを行う。

【MSU 本校でのカリキュラム導入】

今後、教授陣がどのように授業を実施していくのかモニタリングをしながら、サポートする必要があると同時に、MSU 本校で学生に直接研修を行っていく予定である。

【研修の方向性】

音楽基礎力向上のための研修に力を注いできたが、長期的な取り組みでしか成果が出ないので長続きしない。発表の場を定期的に設けるなど生徒にとっての「晴れの舞台」や「修了証の授与」を行い、モチベーションが続くように導いていく予定である。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

- ・ジンバブエの政治・経済の混乱により、社会全体が諦めと暗く重い雰囲気包まれているように感じた。しかし、その中でも現代的な音楽・ダンスや伝統芸能などを行う場面では、自主的に取り組む姿や夢や希望を語る様子が見受けられ、ポジティブな雰囲気を感じた。
- ・研修生の中には10代で最初の子供を産み、その後、何人も子供を産み育て、40代始めて孫を持つ中、音楽教師になるために学位を取得するために勉強している方もいる。子供を早く持ち、子育てをしながらも安定した収入を得たいと思っている若い女性たちもたくさんいる。そういった女性が厳しい社会状況の中でも収入を得て自立することを手助けしていきたい。

・ジンバブエでは、民族紛争の中でショナ人がンデベレ人を虐殺するなど複雑な歴史があるが、現在は表面的には両民族は問題なくやっているように見える。ただ、私が用意したジンバブエの民謡を MSU 本校の研修で学生と演奏しようとしたところ、学生がその曲に対し嫌悪感を示した。曲名がンデベレ語で書かれており読めなければ、曲も知らないとのこと。ハラレの MCAZ では、皆楽しくやっていたので、民族間の問題を思い出し、すぐさま他のことをやることに決めた。民謡を扱うときには、地域により、多数派の人種が違うことにも気を使うべきであると思った出来事である。

・2022年8月に初めてジンバブエの地を訪れて以来、3回の渡航の間に、現地講師として関わる人、コーディネーター、運転手として関わる人など関わる人が厳選されていき、一緒に過ごす時間が長くなることで、気心も知れてきた為に運営や研修の進め方に方向性が定まってきたことが良かった。

(2) 活動の写真



① 寄付された楽器のボランティアによるクリーニング



② プロジェクト開始セレモニー



③ 研修の様子 1



④ 研修の様子 2



⑤講師たちとのミーティングの様子



⑥ジンバブエ朝の番組でプロジェクト紹介のために出演



⑦研修の様子3



⑧女子校音楽科の視察



⑨ミッドランド州立大学 (MSU 本校) への
楽器と教材寄贈



⑩学生への研修

(3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

- ・申請書の作成ために、事業の実施計画を団体内部で意見を出し合い内容を綿密に練り上げていく作業や、四半期ごとの報告書や経費の管理など提出書類の作成において、団体内部や個人で状況を共有・分析することに役に立った。
- ・ジンバブエ社会の現状をよくわかっている JICA ジンバブエ支所の助言やサポートが事業を進行させる上で非常に役に立った。

4. チャレンジ枠の伴走支援制度等について

(1) チャレンジ枠で事業を実施した率直な感想を記載ください。

伴走支援がついたことにより、四半期に一度、状況について相談することができ、助言を得ることができた。

(2) 事業計画策定や業務進捗のモニタリング等の際に伴走支援者から受けた助言が本事業においてどのように役立ったか、具体的な事例があればご紹介ください。

オンライン研修ができなかった時など、計画通りに物事が進まず、変更を余儀なくされたときに、現場の難しさを理解して下さり、『柔軟に現状に対して対応していけば良い』と言う助言をいただいた。また、計画通りに行かないときに、『難しさがわかった』と言うことを事業成果として考えていただけたことが、気を楽に『現場と相談しながら作り上げる』姿勢で臨めた。

(3) 上記2点を踏まえ、団体の成長となった部分や活動の成果、本事業を通じた学びや今後の方向性について記載ください

- ・2021年に立ち上げたばかりの団体なので、当初運営体制も整っていなかったが、この事業を通して団体内部の役割分担など得意分野で動いていく体制が整った。
- ・事業を運営していくことへの全体的な流れが掴めた。団体の運営能力も高めることができた。